

ブロイラー銘柄別性能調査

馬場 俊明・河村 勝雄*・吉田 晶二・諏訪内博之

(青森県養鶏試験場・*三戸地方農林事務所)

The Growing Test for Three Commercial Broilers

Toshiaki BABA, Katsuo KAWAMURA, Shōji YOSHIDA and Hiroyuki SUWANAI

(Aomori-ken Poultry Experiment Station・*Sannohe District Agriculture and Forestry Office)

は し が き

ブロイラー素ひなの銘柄別性能を調査し、ブロイラー生産の指針とすることを目的とし、本試験を実施した。

試 験 方 法

1. 試験期間

試験Ⅰ 昭和55年5月14日～7月16日

試験Ⅱ 昭和55年8月8日～10月10日

2. 試験区分

試験区分及び供試鶏銘柄は表1のとおりである。

表1 供用ひな及び試験区分

試験別	区 分	銘 柄	羽 数		
			♂	♀	計
試験Ⅰ	1	A	51×2	51×2	102×2
	2	B	51×2	51×2	102×2
	3	C	51×2	51×2	102×2
	計		153×2	153×2	306×2
試験Ⅱ	1	A	51×2	51×2	102×2
	2	B	51×2	51×2	102×2
	3	C	51×2	51×2	102×2
	計		153×2	153×2	306×2

注. A : ハバード
B : フ ジ
C : チャンキー

表3 育成成績, 体重, 増体量, 飼料消費量, 飼料要求率

		育 成 成 績			死亡, とう汰原因			体 重 (g) (9週令時)	増 体 量 (g) (0~9週令)	飼 料 消 費 量 (g) (9週令)	飼 料 要 求 率 (%) (9週令)
		開始時 羽 数	終了時 羽 数	育成率	脚 弱 (とう汰)	急 死	不 明				
♂	A	204	192	94.0	5	7	0	3,059	3,018	6,843	2.27
	B	204	192	94.0	2	7	3	3,153	3,112	6,721	2.16
	C	204	196	96.0		7	1	3,085	3,043	6,790	2.23
♀	A	204	197	96.5	1	4	2	2,447	2,407	5,766	2.40
	B	204	197	96.5	3	3	1	2,499	2,458	5,736	2.33
	C	204	202	99.0	2	0	0	2,467	2,425	5,672	2.34
計平均 又は均	A	408	389	95.3	6	11	2	2,753	2,712	6,305	2.32
	B	408	389	95.3	5	10	4	2,826	2,785	6,229	2.24
	C	408	398	97.5	2	7	1	2,776	2,734	6,231	2.28

注. 体重, 増体量, 飼料消費量, 飼料要求率 1羽当り

3. 飼料及び管理

給与飼料は市販のブロイラー用配合飼料を供用し、0～28日令まで前期用, 29～56日令まで後期用, 57～63日令までは休薬用を給与し、飼料及び水は不断給与した。育すうは平飼で雄雌別飼, 21日令まで電熱式ブルーダー使用, その後は別の室へ移動し、3.3㎡当たり40羽収容, 敷料はモミガラを用い、点灯は終夜行った。衛生管理その他は当場の慣行によった。飼料成分は表2のとおりである。

表2 飼料成分

項 目	前期用	後期用	休 薬
	0～28日令	29～56日令	57～63日令
粗たん白質	22.0%以上	18.0%以上	18.0%以上
粗 脂 肪	4.0 "	4.0 "	4.0 "
粗 せ ん い	5.0%以下	5.0%以下	5.0%以下
粗 灰 分	8.0 "	8.0 "	8.0 "
カルシウム	0.9%以上	0.9%以上	0.9%以上
り ん	0.3 "	0.3 "	0.3 "
カ ロ リ ー	3,030以上	3,030以上	3,030以上

結 果 及 び 考 察

育成成績, 体重, 増体量, 飼料消費量及び飼料要求率, 解体成績, 経済性について調査したところ次のような結果を得た。成績は試験Ⅰ, Ⅱ回の平均値を示した。

(1) 育成成績

育成成績は表3に示すとおりである。餌付から9週令ま

での育成率は、雄雌平均で A, B 区が 95.3% と低かったのに対し C 区は 97.5% と優れた。死亡、とう汰の原因は、急死症候群による死亡と、脚弱症状を呈したものをとう汰したことによるものであり、いずれの銘柄においても共通してみられているが、C 区が他の区に比べ少なかったために育成率の優れる結果となった。

(2) 体重と増体量

9 週令時の体重は表 3 に示すとおりである。B 区が雄雌ともに最も大きく平均してみると B 区が 2,826g 次いで C 区 2,776g > A 区 2,753g の順であった。0~9 週令までの増体量も体重と同じ傾向で B 区が 2,785g と最も多く次いで C 区 2,734g > A 区 2,712g の順であった。

(3) 飼料消費量と飼料要求量

飼料消費量は表 3 に示すとおり、B 区が 6,229g と最も少なく次いで C 区が 6,231g A 区が 6,305g であり、体重、増体量の大きい順に少ない傾向がみられた。したがって飼

料要求率は、B 区が最もよく 2.24 > C 区 2.28 > A 区 2.32 の順となった。

(4) 解体成績

各区とも 1 回の試験につき、雄、雌 30 羽ずつ無作為に抽出し計 180 羽を調査した結果表 4 に示したとおりである。正肉重量は生体比で C 区が 39.6%、B 区 39.5% であったのに対し A 区が 38.8% と最も少なく、正肉歩止りが悪かったことがうかがえる。腹腔内の脂肪量は、C 区が 2.37% と最も少なく次いで B 区 2.54%、A 区が 2.64% と多かった。

(5) 経済性

9 週令ひなを 100% 販売したものと試算したところ表 5 に示すとおりである。販売総額は、育成率の良かった C 区が多く次いで B 区、A 区の順となったが 1 羽当たり販売額は増体の良かった B 区が最も多く、次いで C 区 > A 区の順となった。粗収益では飼料要求率のよかった B 区が最も多く飼料要求率の悪かった A 区が少なかった。

表 4 解体成績

(g, %)

	生体重	と 体		骨 付 肉		正 肉		脂 肪		
		重 量	生体比	重 量	生体比	重 量	生体比	重 量	生体比	
♂	A	3,133	2,846	90.8	2,268	72.4	1,203	38.4	76	2.41
	B	3,172	2,883	90.9	2,309	72.8	1,243	39.2	73	2.31
	C	3,175	2,885	90.9	2,301	72.5	1,241	39.1	68	2.13
♀	A	2,533	2,300	90.8	1,811	71.5	996	39.3	74	2.91
	B	2,544	2,306	90.6	1,812	71.2	1,012	39.8	72	2.81
	C	2,539	2,311	91.0	1,805	71.1	1,018	40.1	67	2.64
平均	A	2,833	2,573	90.8	2,040	72.0	1,100	38.8	75	2.63
	B	2,858	2,595	90.8	2,061	72.1	1,128	39.5	73	2.54
	C	2,857	2,598	90.9	2,053	71.8	1,130	39.6	68	2.37

注. と 体: 放血、抜羽後の重量 正 肉: 胸部、もも、ささみの重量
骨付肉: と体から頭、脚、内臓を除いた重量 脂 肪: 腹部脂肪

表 5 経済性

	粗 収 入			費 用			粗 収 益			
	販売重量 (kg)	販売総額	販売ひな 1 羽当り	ひ な 購入費	飼 料 費	計	販売ひな 1 羽当り	総 額	生体 1 kg 当たり	販売ひな 1 羽当り
A	1,069.3	252,354	648.7	37,536	195,257	232,793	598.4	19,561	18.2	50.2
B	1,097.4	258,986	665.7	37,536	193,164	230,700	593.1	28,286	25.7	72.7
C	1,102.6	260,213	253.8	37,536	197,419	234,955	590.3	25,258	22.9	63.4

○ プロイラー価格 kg 当たり 236 円 ○ ひな価格 92 円
○ 飼料価格 前期 87 円/kg 後期 78.1 円/kg 休菜 76.1 円/kg

要 約

- (1) 育成率は雄雌平均で C 区 97.5% と最も良く、A, B はそれぞれ 95.3% であった。
- (2) 9 週令時体重は雄雌平均で B 区 2,826g、C 区 2,776g、A 区 2,753g で B 区が優位であった。
- (3) 0~9 週令までの雄雌平均増体量は、B 区が 2,785g で最も多く C 区が 2,734g、A 区が 2,712g であった。
- (4) 飼料消費量は 9 週令までの雄雌平均で A 区が 6,305g

- と最も多く C 区 6,231g > B 区 6,229g の順であった。飼料要求率は増体がよく飼料消費量の少なかった B 区が 2.24 と最も良く、C 区 2.28 > A 区 2.32 であった。
- (5) 解体成績は正肉重量は C 区が 39.6% B 区 39.5% で A 区が 38.8% と最も少なかった。腹腔内脂肪量は C 区が 2.37% < B 区 2.54%、A 区 2.63% の順であった。
 - (6) 経済性は、飼料要求率の最もよかった B 区の粗収益が多く、飼料要求率の劣った A が少なかった。